

活動報告

ユニバーサルスポーツの普及促進に関する研究
 —名古屋市におけるユニバーサルスポーツの導入を事例として—
 Research on prevail and promotion of universal sports
 — A Case Study on the Introduction of Universal Sports to Nagoya City —

兒玉 友¹⁾ 藤田 紀昭¹⁾ 金山 千広²⁾

Yu KODAMA, Motoaki FUJITA, Chihiro KANAYAMA

- 1) 日本福祉大学 スポーツ科学部
Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University
- 2) 立命館大学 産業社会学部
College of Social Sciences, Ritsumeikan University

キーワード：障害者スポーツ，共生社会，連携体制，ユニバーサルスポーツ

Keywords: Para-sports, Inclusive Society, Cooperation system, Universal sports

I. はじめに

近年、スポーツを通じた共生社会の実現については、多様な主体におけるスポーツ実施環境の整備等に取り組んできた。障害者スポーツに関しては、第2期スポーツ基本計画（2017年度から5年間）において週1回以上のスポーツ実施率を40%とし、障害のある人とない人が一緒に親しめるスポーツ・レクリエーションの推進等、様々な障害者スポーツの振興を図ってきた。しかし、2021年度に調査した障害者のスポーツ実施率は、週1回以上が31.0%（前年度から6.1ポイント増）と増加傾向にあるものの依然目標達成には至っていない（スポーツ庁、2021）。また、女性については男性よりもスポーツ実施率が低い状況であるなど、引き続きスポーツ実施環境の整備等の取り組みが求められている。

このような中、国が2022年3月に策定した第3期スポーツ基本計画では、「社会の変化や状況に応じて、既存の仕組みにとらわれずに柔軟に対応する

というスポーツを「つくる／はぐくむ」という視点」が加わった（スポーツ庁、2022）。同年8月には、障害者スポーツ振興方策に関する検討チーム報告書（高橋プラン）が策定され、基本的な考え方・方向性の中に、健常者と障害者のスポーツを可能な限り一体のものとして捉え、「ユニバーサルスポーツ」の考え方を施策全般において推進することが盛り込まれた。

用具やルールを工夫して、障害の有無や年齢、性別等に関係なくスポーツを楽しむことができる「ユニバーサルスポーツ」は、共生社会の実現への寄与が期待されると考えられる。ユニバーサルスポーツの例として、パラリンピックの正式競技である「ボッチャ」、全国障害者スポーツ大会のオープン競技である「ふうせんバレーボール」などが挙げられるが、普及に関する具体的な方策は示されていない。

そこで、本研究では、2021年度に名古屋市で行われたイベント「スポーティブ・ライフ in 瑞穂」で出展した「ユニバーサルスポーツ」を事例とし、

ユニバーサルスポーツの普及促進方策を検討することを目的とした。

II. 方法

本研究では、前述の通り、2021年11月23日に名古屋市で行われたイベント「スポーティブ・ライフ in 瑞穂」で出展した「ユニバーサルスポーツ」を対象とする。本研究の目的を達成するため、①名古屋市のスポーツ振興に関する事前調査②ユニバーサルスポーツの事例検討③現地会場でのユニバーサルスポーツの実践及びアンケート調査を実施した。

III. 結果および考察

1) 名古屋市のスポーツ振興の現状

名古屋市では、2018年2月に第2期スポーツ推進計画を策定し、障害の有無や年齢、性別等に関わらず、誰もが安心・安全・快適にスポーツに親しむことができるよう、運動・スポーツを「する」「みる」「ささえる」ことで市民のスポーツ実施率向上を目指したスポーツ振興を行ってきた。2020年度には、スポーツ行政が一元化された。さらに、第20回アジア競技大会・アジアパラ競技大会(2026/愛知・名古屋)の開催が予定されている。名古屋市は、この大会を一過性のスポーツイベントで終わらせるのではなく、スポーツの持つ幅広い価値を、市を取り巻く課題の解決に活用する契機とするため、「名古屋市スポーツ戦略」(2021年度から10年間)を掲げ、障害の有無や年代、性別等に関

わらず、市民の誰もが一緒に楽しく競い合える「ユニバーサルスポーツ」を普及振興としている(図1)。

しかし、30代、40代の主にビジネスパーソンを中心とする年代及び障害者のスポーツ実施率が低くなっている状況である(名古屋市, 2021)。また、新型コロナウイルスの影響により、多くの運動・スポーツの機会が減少したことに伴い、運動不足による健康二次被害のリスクにあたって、特に高齢者をはじめとし、運動・スポーツの重要性について再認識されているところである。

そうした中、日本福祉大学は2021年度名古屋市から委託を受け、「ユニバーサルスポーツ習慣化促進事業」を実施することとなった。主な内容は、ユニバーサルスポーツの事例検討、名古屋市主催のイベント「スポーティブ・ライフ in 瑞穂」にユニバーサルスポーツのブースを出展し、参加者へのアンケートを実施することであった。

2) ユニバーサルスポーツの考案

イベント出展に向け、スポーツ科学部3年生(兒玉ゼミ)で新たなユニバーサルスポーツの事例検討を行った。考案時は、過去の経験や常識にとらわれることなく、道具やルールを工夫し新たなスポーツをつくるよう心がけた(表1)。

学生らが考案したユニバーサルスポーツの例を表2に示す。

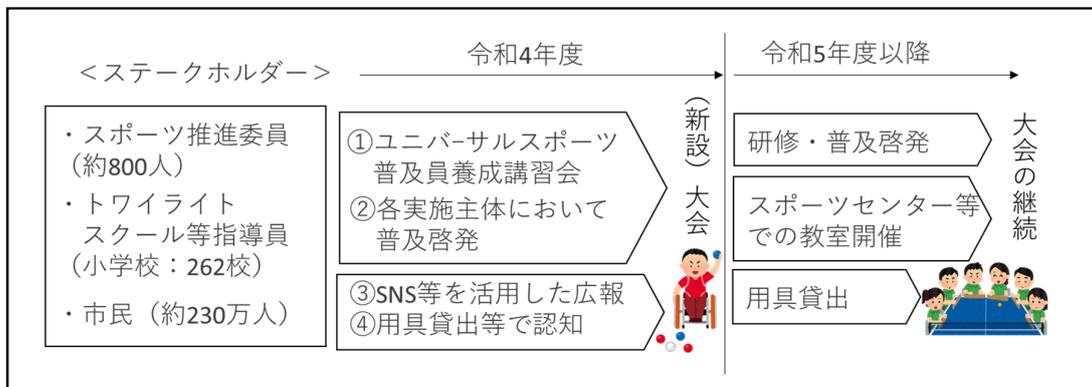


図1 ユニバーサルスポーツの中長期的な展開イメージ(名古屋市)
(名古屋市, 2022より筆者作成)

表1 発想の転換のためのチェックリスト

視点		考え方 (卓球の場合)
代用	他の材料、他の場所、代用品	・ラケットをうちわにする ・外で行う
統合	組合せ、障がいの有無	・複数人で行う ・健常者と障がい者でダブルスを組む
応用	ルール変更、他競技のルールを真似る	・ダブルスの際、どちらが打球してもよい ・2バウンドにする
拡大	何かを付け加える、増やす	・コートを大きくする ・回数や時間を増やす
縮小	シンプル、小さく、少なく	・既存のルールから、シンプルルールに変更する ・障がいの重い側の卓球台を小さくする
転用	他の使い道、新しい用途	・他競技で卓球のラケットを使えないか ・卓球台と卓球ボールでビリヤードをする
逆転	順番、役割、勝敗、上下逆	・ボールのバウンド数を競う ・ネットの下を潜らせてラリーをする

「障がいのある人のスポーツ指導者教本」(2020)より筆者作成

表2 学生が考案したユニバーサルスポーツ (例)

タイトル1	なわとびゲッター
人数	1人～
用具	なわとび、審判台や段ボール、テープ
方法	・なわとびを各自でアレンジして結ぶ
	・3m、5mなどいくつかラインを設定する
	・参加者は自分で投げるラインを決める
	・1人3回行い、かかった数を競う
バリエーション	・座位で行う
	・高さや大きさなどを工夫し、難易度を調整する
	・チーム戦を行う
タイトル2	スプーンリレー
人数	4人～
用具	様々な種類のスプーン・ボール
方法	・4人1チームで自己紹介を行う
	・各自でスプーンを選ぶ
	・一列に並び、名前を呼びながらボールを渡す
	・ボールを往復させてタイムを競う
バリエーション	・様々な大きさのスプーンやレンゲを使用する
	・使用する道具はくじ引きで決める
	・しりとりをしながら行う

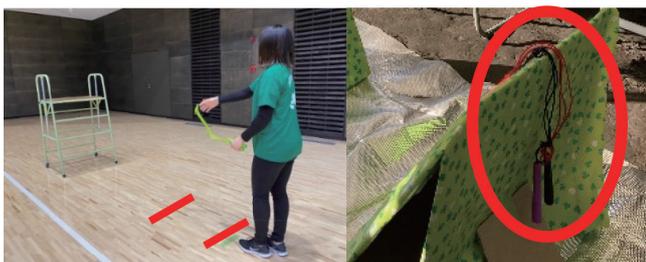


写真1 なわとびゲッター (ひっかかれればOK)



写真2 スプーンリレー (落とさず運ぶ)

3) スポーティブ・ライフ in 瑞穂「ユニバーサルスポーツ」ブース出展

名古屋市では、スポーツの楽しさ・意義への気づきを促進し、スポーツに親しむきっかけをつくるため、10月11月をスポーティブ・ライフ月間としており、月間中は、市内スポーツ施設をはじめとする公共施設において各種スポーツイベントを開催している。その企画の1つとして、2021年11月23日、パロマ瑞穂スタジアムにおいて、障害者のみならず子どもから高齢者まで誰もが参加できるスポーツイベント「スポーティブ・ライフ in 瑞穂」が開催された。本学スポーツ科学部3年生（兒玉ゼミ）12名が主体となり、ユニバーサルスポーツのブースを出展した。テント2つ分のスペースを活用し、学生らが考案した「なわとびゲッター」「ユニバーサルボッチャ」を実施した。当日は、子どもから高齢

者まで395名の参加があった。参加者の多くは子ども（幼児から小学生）とその親であった。各自でなわとびを投げる位置を決めたり、なわとびを自由に結ぶなど、誰もが楽しめるよう工夫した。当日は、フォトロゲイニングのポイントエリアであったことから、多くの参加があった。なわとびゲッターとユニバーサルボッチャを比較すると、ユニバーサルボッチャの方が、何度もチャレンジする人が多く人気が高かった。

4) アンケート結果

ユニバーサルスポーツを体験した方に対し、「ユニバーサルスポーツ」の普及振興に関するアンケート調査を実施した。アンケートは紙による無記名式で行った。分析には、統計パッケージSPSS Ver.21を用いた。なお、イベント参加者395名に対し、回答者が75名の理由として、子ども（幼児～小学校低学年）の参加が多く、回答者はその親であったこと、フォトロゲイニングの参加者はタイムを競うため、アンケート回答の時間確保が難しい等の理由があげられる。



写真3 イベントの様子

表3 対象者

性別	回答数	%
男性	16	21.3
女性	46	61.3
無回答	13	17.3



写真4 なわとびゲッターとユニバーサルボッチャ

表4 年代

年代	回答数	%
10歳代	2	2.7%
20歳代	9	12.0%
30歳代	16	21.3%
40歳代	20	26.7%
50歳代	11	14.7%
60歳代	5	6.7%
70歳以上	0	0.0%
無回答	12	16.0%

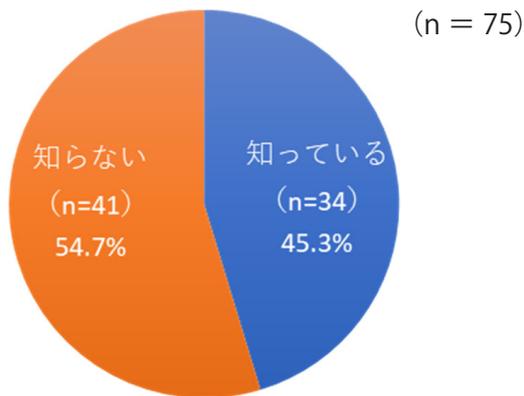


図2 あなたは、「ユニバーサルスポーツ」という言葉を知っていますか

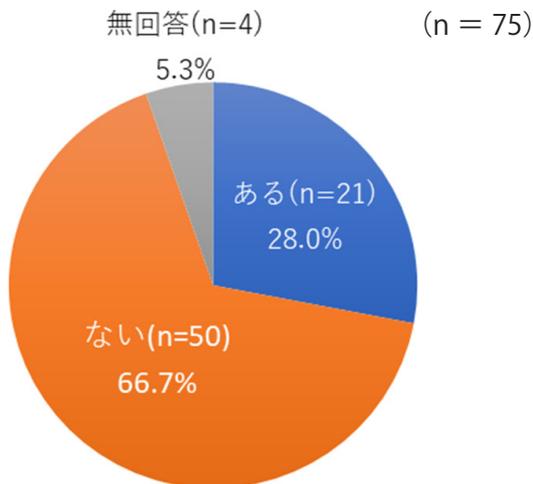


図3 あなたはユニバーサルスポーツをしたことがありますか

ユニバーサルスポーツをしたことがあると答えた方21名(図3)に、あなたが行ったことがあるユニバーサルスポーツは何ですかと尋ねたところ、「ボッチャ」(90.5%)が最も多く、次いで「フライングディスク」「風船バレー」「タグ・ラグビー」であった。その他については、「サッカー」であった(図4)。ボッチャは重度障害のある人が参加できるスポーツであり、近年、小学校や総合型地域スポーツクラブ等で教室やイベントを行う機会が増えてきていることが要因としてあげられる。

ユニバーサルスポーツをしたことがあると答えた方21名(図3)に、あなたは、ユニバーサルスポーツを誰と行いましたかと尋ねたところ、「学校や職場の人と」(33.3%)が最も多く、次いで「家

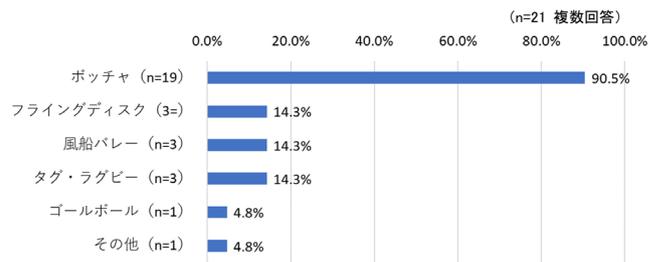


図4 あなたが行ったことがあるユニバーサルスポーツは何ですか

族(配偶者、子ども、孫など)(23.8%)、「友人・知人やその家族と」(19.0%)であった。その他(9.5%)については、「教室の仲間」「イベントに参加した人と」であった(図5)。



図5 あなたは、ユニバーサルスポーツを誰と行いましたか

ユニバーサルスポーツをしたことがあると答えた方21名(図3)に、あなたは、ユニバーサルスポーツをして、どのような印象をお持ちになりましたかと尋ねたところ、「ルールがわかりやすかった」(61.9%)が最も多く、次いで「体力や体格に影響されなかった」(42.9%)、「場所を問わずできた」「道具が用意しやすかった」(14.3%)であった(図6)。このことから、ユニバーサルスポーツは、障

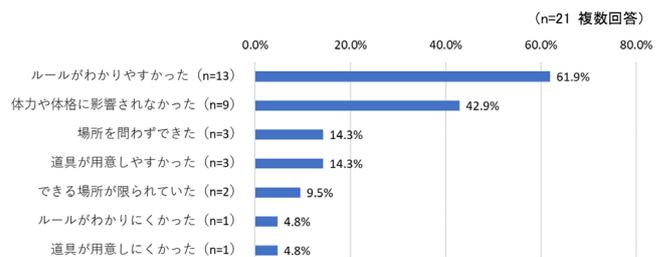


図6 ユニバーサルスポーツをして、どの様な印象をお持ちになりましたか

害の有無や年齢にかかわらず誰もが楽しめるスポーツであることが分かる。

ユニバーサルスポーツをしたことがないと答えた方50名(図3)を対象に、あなたは今後、ユニバーサルスポーツをしたいと思いますかと尋ねたところ、「思う」(64.0%)が最も多く、次いで「どちらともいえない」(26.0%)、無回答(10%)、思わない(0%)であった(図7)。

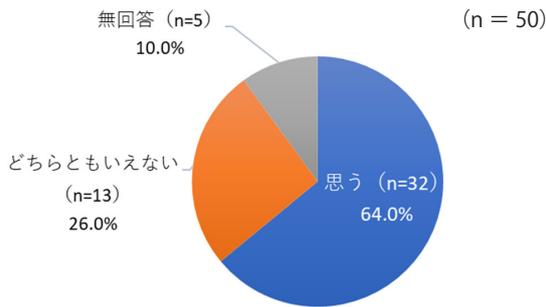


図7 あなたは、今後、ユニバーサルスポーツをしたいと思いますか

ユニバーサルスポーツをしたことがないと答えた方50名(図3)のうち、「どちらともいえない」「思わない」と答えた方13名(図7)を対象に、あなたがユニバーサルスポーツをしたいと思わない理由は何ですかと尋ねたところ、「どんなスポーツかわからない」(38.5%)が最も多く、次いで「やる機会がない」「情報がない」(30.8%)であった。

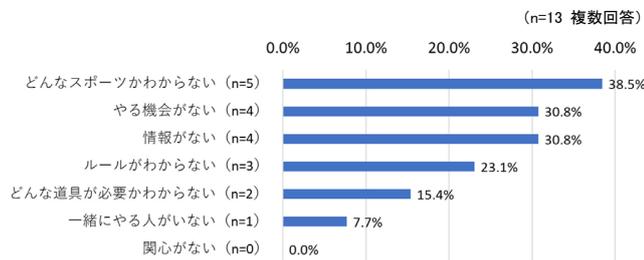


図8 あなたがユニバーサルスポーツをしたいと思わない理由は何ですか

ユニバーサルスポーツを行う場所や施設について尋ねたところ、「地域のスポーツセンター」(58.7%)が最も多く、次いで「学校の体育館」(38.7%)、「近所の公園」(25.3%)であった。その他は、「分

からない」「老人センター」であった(図9)。ユニバーサルスポーツを行う場所や施設で「学校の体育館」と答えた方29名に、小学校・中学校・高校・大学のどの場所か尋ねたところ、「小学校」(96.6%)が最も多く、次いで「中学校」「高校」「大学」(10.3%)であった。このことから、ユニバーサルスポーツの普及促進を図るためには、小学校や区のスポーツセンター等の身近な学校や施設で行う必要がある。

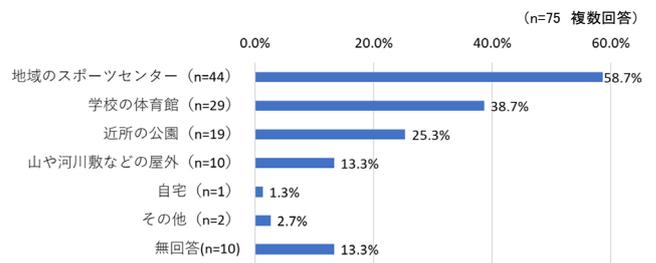


図9 ユニバーサルスポーツを行う場所や施設についてあなたの考えを教えてください

ユニバーサルスポーツを継続的に行うためには何が必要かについて聞いたところ、「一緒にスポーツを行う仲間」(41.3%)が最も多く、次いで「体験の機会」(34.7%)、「集まるための情報」(33.3%)であった。その他は、「費用」「知ってもらう」「分からない」であった(図10)。

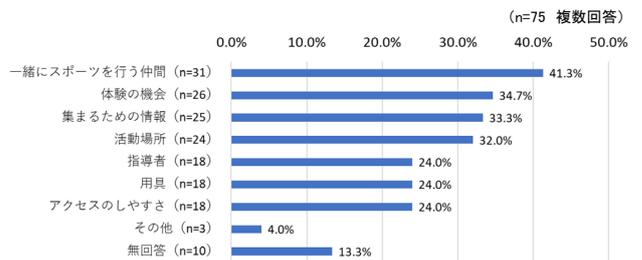


図10 ユニバーサルスポーツを継続的に行うためには何が必要だと思いますか

障害の有無や年齢にかかわらず実施できるユニバーサルスポーツという発想は、どのような効果があると思うかについて聞いたところ、「親子や家族の交流」(50.7%)が最も多く、次いで「障害者のスポーツの参加の拡大」(40.0%)、「高齢者のいき

が「いづくり」(32.0%)であった。

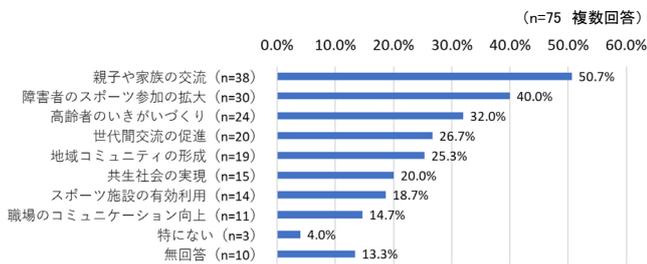


図11 障害の有無や年齢にかかわらず実施できるユニバーサルスポーツという発想は、どのような効果があると思いますか

IV. まとめ

本研究では、「スポーティブ・ライフ in 瑞穂」で出展した「ユニバーサルスポーツ」を事例とし、ユニバーサルスポーツの普及促進方策を検討することを目的とした。アンケートの結果から、ユニバーサルスポーツは、ルールが分かりやすく、障害の有無や年齢にかかわらず、幅広い世代で楽しめるスポーツであることが明らかになった。特に、ボッチャやフライングディスクの実施率が高かった。藤田ら(2022)は、ボッチャの認知度が2014年の調査では1.9%だったものが2020年度調査では29.9%まで上がっていたと報告している。実施場所は、小学校や区のスポーツセンターと答えた方が多く、身近な場所で実施することが有効であると考えられる。一方で、ユニバーサルスポーツの認知度は低く、実施する機会や情報がないとの結果から、ユニバーサルスポーツの認知度向上のための取り組み、情報発信等を積極的に行っていく必要がある。ユニバーサルスポーツを継続的に行うために必要なこととして、一緒にスポーツを行う仲間や体験の機会があげられたことから、身近な地域でスポーツ指導を行っているスポーツ推進委員等に研修を行い、関係団体等をつなぐコーディネーターとして、教室やイベント等を展開していくことが求められる。

文献

スポーツ庁(2021): 障害者スポーツ推進プロジェクト(令和3年度), https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop06/list/detail/1416557_00005.htm, 2022年10月10日閲覧.

スポーツ庁(2022): 第3期スポーツ基本計画, https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413_00001.htm, 2022年10月10日閲覧.

藤田紀昭, 安藤佳代子, 兒玉友(2022): 障害者スポーツに関する言葉の認知度および意識に関する研究ー2014年~2020年度の意識の推移に注目してー, 日本福祉大学スポーツ科学論集, 5: 83-86